

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(40)

——第369号から第378号——

門 田 俊 夫

第369号 1712年5月3日(土曜日)

【アディソン】

単に語られるだけのものは、たとえ度合いが同じであっても
目にするものほど情熱を掻き立てることはない。(ホラティウス)¹⁾

ミルトンは、人類史の最初期について視覚的な形で描写したあとで、その後については物語形式で書き上げます。ミカエルがアダムを楽園の外に連れ出すさいに、ミルトンはとても立派な根拠を考え出しています²⁾。とはいえ、目に入る形でこれほど入り組んで複雑な物語を描写することは、ミルトンにとって大変厄介なことであったに違いありません。しかしながら、私としましては、数多くの苦難があったとしても、ミルトンは巧みにやり終えたものと思います。私の意見を率直に述べますと、人類史を提示する視覚的な箇所、ならびに物語形式の一部は、まるで歴史画家がこのテーマの半分には彩色を施し、残りの半分を書き留めたようなものだと思います。もしミルトンの詩がその力を失くしているとすれば、それはこの物語形式の箇所と言えます。彼はこの箇所では神性に気を使い過ぎるために、詩のことに十分な注意が向いていないのです。とはいえ、物語もいくつかの箇所ではとても巧みに語られています。そういった箇所では十分に詩的な彩りが添えられています。特に、バベルの塔の建設に携わる人々に生じる混乱³⁾とかエジプトの悪疫についての描写⁴⁾などにそれが伺えます。あられと火を伴う嵐、3日間にわたって全土を覆い尽くす暗闇の描写にはとても力強いものがあります。これに続く詩文は、聖書の気高い描写をベースにして書かれています。

このようにして十の深手を負ったナイル河の鱈も、
さすがにおとなしくなり、逗留者であるかの民の出国を

1) ホラティウス『詩の技法』180-1

2) 『失楽園』第12巻、8-10行。

3) 『失楽園』第12巻、52-62行。

4) 『失楽園』第12巻、181-8行。

認めるようになる。こうやって頑な心もいったんは柔和にはなったわけだが、やはり惰性抑え難く、一度解けた心も、ちょうど溶けた水がそのあと固い氷になるように、前よりももっと頑なになる有様だ。王は先に放免した彼らをまたもや怒りにまかせて追跡する。しかし、海は王とその軍勢を呑み込むが、彼らだけはそそり立つ二つの水晶の壁の間をあたかも乾いた陸地に行くが如く、無事に通過させてくれる。これは海がモーセの杖に恐れ戦き、彼に救われた民が対岸に着くまで二つに分かれて立っていたからだ⁵⁾。

リバー・ドラゴンとは、エジプトの肥沃の源泉であるナイル河に棲む鱷のことです。この言及はエゼキエル書の崇高な一節から引かれています。「語って言え、主なる神はこう言われる。エジプトの王パロよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。あなたはその川の中に伏す大なる龍で、『ナイル川はわたしのもの、わたしがこれを造った』と言う。』⁶⁾ 同様に、ミルトンはもうひとつとても気高く詩的なイメージを提供しています。これはほぼ一言一句モーセの物語を模写したものです⁷⁾。

王が夜を徹して追撃してくれば、夜明けまで暗黒がその間に立ちはだかつてその接近を拒み、夜が明ければ今度は神が火の柱と雲の中から様子を窺い、王の全軍を悩まし、その戦車の車輪を粉碎される。そして神の命令によってモーセが再びその強力な杖を海に向かって打ち振ると、海はその杖に素直に従い、忽ち隊伍を組んで追ってくる王の軍勢の上に怒涛となって襲いかかり、全軍を呑みつくしてしまう⁸⁾。

この挿話を持ち込んだ主たる意図は、アダムに敬虔な人物というものはどういうものかを理解させ、墮落したアダムに人間性を回復させることでしたので、ミルトンは救世主の系統を引くアブラハムの家系に限定します。ミカエルは族長が実際には約束の地に向かっているのだと描写されます。この箇所は物語に格別な精彩を与えます。

彼がどんなに強い信仰を心に抱いて今までの神々を、親しい人々を、故郷であるカルデヤのウルの地を、あとにして出て行き、やがて浅瀬を渡ってハランへ赴こうとしているか、その様子はお前には見えないかも

5) 『失樂園』第12巻、190-9行。

6) 『エゼキエル書』第29章第3節。

7) 『出エジプト記』第14章第19節-第31節。

8) 『失樂園』第12巻、206-14行。

しれないが、わたしにはまざまざと見える、——ああ、彼に後から、牛や羊の群れが、多くの召使いの行列が重々しくついて行く。かといって、何も未知の国のなかをうらぶれた姿で放浪しているのではなく、自分を召し給うた神にすべての富をゆだねて放浪しているのだ。彼はカナンに着く。シケムの周辺に、或はモレの平原に彼の天幕が張られるのが、わたしには見える。その地で、約束に従って彼は子孫への贈り物として、その全版図を受け取る。それは実に、ハマテから南は^{あらの}曠野にいたり（まだ名称はないが、やがて与えられる名称でわたしは呼んでいるのだ）⁹⁾

おそらく『アイネーイス』第6歌におけるウェルギリウスの構想力が、ミルトンにこの挿話へのヒントを与えたと考えられますので、最後の行はウェルギリウスの翻訳となっています。そこではアンキセスが場所の名前を口にし、その後そう呼ばれることになります。

これらの名がつくのは時が来たとき。いまは名もない土地だ¹⁰⁾。

ミルトンは、救世主を発見したときのアダムの心に湧き上がる喜びおよび嬉しさを実に見事に描写しています¹¹⁾。彼はその日を予徴と幻を通して距離を置いて見ますが、そこに喜びを見出します。彼は人間の救いと楽園の復権を知るとき、有頂天になって「おお。まさにこれこそ無限の恵み、広大な無辺の恵み、この善きものをすべて悪より生ぜしめ、悪を善きものに変え給うとは！」¹²⁾と声を発します。

私はミルトン論の第6回目¹³⁾で、英雄詩というものは、優れた批評家たちの考えによれば、ハッピーエンドでなければならず、読者には多くの疑念や恐れ、悲しみや不安を経験させ最終的には平穩で満ち足りた気持ちにさせるものでなくてはならない、と述べました。ミルトンの寓話は、魅力的な数多くの特質を備えているものの、この点では欠陥があります。それゆえ、ここではこの無理もない欠陥の埋め合わせをする方法を見つけ出して、ミルトンが実に念入りな創造力だけでなく、申し分のない判断力を発揮したのだということを明らかにします。ミルトンは人間の敵を、最後の最後に提示するのですが、この上ない屈辱と失望した状態に置きます。私たちは人間の敵が灰を口にし、地面を這いまわり、塗炭の苦しみを背負わされている姿を目にします¹⁴⁾。それに対して、わが始祖の二人は夢と展望で元気づけられ、救いの約束が与えられ、ある意味では、彼らが失ったよりももっと大き

9) 『失樂園』第12巻、128-40行。

10) 『アイネーイス』第6歌、776行。

11) 『失樂園』第12巻、372-85行。

12) 『失樂園』第12巻、469-70行。

13) 第297号参照。

14) 『失樂園』第10巻、566行。

な幸福へと向かいます。要するに、サタンは勝利を味わっている盛りに悲惨を覚え、アダムは惨めさのどん底で勝利を収めるわけです。

『失樂園』の結末はとても気高いものとなっています。アダムと大天使ミカエルの最後の語りには、道徳的で教訓的な気持ちがみなぎっています¹⁵⁾。イヴを襲う眠り、そして、その眠りが彼女の不穏な心を鎮める効果が、読者に同様の慰めをもたらします。読者は人類の母が口にする最後の美しい語りを聞くと必ず密やかな喜びと満ち足りた気持ちになります。

あなたがどこへ行き、どこから帰ってこられたか私は
知っています。神は眠りのなかにも常に在し給う方であり、
夢はいろいろなことを私たちに教えてくれます。神は慈悲の
心からそのような夢を送り、そのなかで、悲嘆と心の悩みに疲れ、
眠り込んでしまっていた私に或る喜ばしいことを告げられました。
とにかく、今こそ先に立って私を導いて下さい。私にはもはや
躊躇はありません。あなたと一緒にここを出ることはここに
留まることです。あなたと別れてここに留まることは心ならずも
ここを出てゆくことと同じです。あなたは私の身勝手な罪の
ためにここを追放されるのです、——今の私にはあなたこそ大空の
下におけるすべてでありすべての場所なのです。私のせいで
すべてが失われたとはいえ私から生まれる、あの約束された御子が
すべて回復し給うという、身に余る恩寵めぐみを示された今、私は
その慰めを心にしっかり抱いて、ここを立ち去りたいのです¹⁶⁾。

『失樂園』の締め括りとなるこれに続く詩行は、さらにもっと栄光に満ちた詩的なイメージと表現となっています。

ヘリオドロスは、『エチオピア物語』の中で、神々の動きは人間の動きと異なり、神々は足を動かして一步一步進むのではなく、大地の表面を体全体で泳ぐように滑ってゆくのだと言います¹⁷⁾。読者は、ミルトンが楽園の住民となる天使たちにこれと同じ動きがあることを実に詩的に描写していることに気づかれるに違いありません。

われわれ人類の母なるイーヴはこのように話した。聞いていた
アダムは心から喜んだが、何も答えなかった。すぐそばに
大天使が立っていたからだが、しかも、燦然たる隊伍を整えた
智天使チェラフの一隊が、彼方の山から定められた見張りの場所へと、
流星の群れさながら地面を流れるように降りてきたからだ。

15) 『失樂園』第12巻、552-605行。

16) 『失樂園』第12巻、610-23行。

17) ヘリオドロス『エチオピア物語』第3巻。ヘリオドロスは3世紀のギリシアの作家で恋愛物語作者。

その有様は、川から立ちのぼった夕霧が沼の上を漂ってゆき、
家路を急ぐ農夫の踵にまつわりつきながら素早く流れてゆくのに
似ていた。天使たちの面前では神の剣が高く掲げられ、打ち
振るわれていたが、その激しく燃える様子は彗星のようであった¹⁸⁾。

ミルトンはつぎの節で大天使の振舞いを回想することで彼の創造力を援護射撃します。
聖書では大天使がロトとその家族を導いています¹⁹⁾。ここでは、そのときの出来事を優雅
に利用しているわけです。

ミカエルは、なおも躊躇しているわれわれの祖
アダムとイヴを左右の手で大急ぎでかかえるようにして
把え、一刻の猶予もなく東の門の方へ、そしてそこから、
さらに急坂をくだって下に遙か横たわっていた野原へと、
大急ぎで連れていった。そして、そこまできると天使の
姿は消えてしまった。彼らは、ふりかえり、……²⁰⁾

わが始祖が楽園を振り返ってみたときに驚きの表情を示す場面は、読者の想像力に強く
訴えかけます。このとき彼らが流す涙は自然そのものだからです。

自分たち二人の幸福な住処すまいの地であった楽園パラダイスの東にあたる
あたりをじっと見つめた。その一帯の上方では神のあの焰の
剣がふられており、門には天使たちの恐ろしい顔や燃えさかる
武器の類がみちみちていた。彼らの眼からはおのずから
涙があふれ落ちた。しかし、すぐにそれを拭った。
世界が、——そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や
彼らの眼前に広々と横たわっていた。そして、摂理が彼らの
導き手であった²¹⁾。

この神聖な作品に最小限の変更を加えることが許されますと、その後続く2行よりも
素晴らしい終わり方になるものと思います。

二人は手に手をとって、漂泊の足どりの緩やかに、
エデンを通して二人だけの寂しい路を辿っていた²²⁾。

18) 『失樂園』第12巻、624-34行。

19) 『創世記』第19章第16節。

20) 『失樂園』第12巻、637-41行。

21) 『失樂園』第12巻、641-7行。

この2行は美しいものですが、先行する節に呑み込まれてしまい、読者の心に以前の苦悩を再び蘇らせてしまいます。

世界が、——そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や
彼らの眼前に広々と横たわっていた。そして、摂理が彼らの
導き手であった²³⁾。

『失樂園』と『アイネーイス』の巻数は同数となっています、わがミルトンは初版では10巻としていましたが、その後、第7巻と第11巻に若干加筆して、それぞれを2巻としました²⁴⁾。この分割は、精査してみますと分かりますが、見事な識見を持って行われました。これは単にウェリギリウスにある奇想天外な美を求めて行ったものではなく、この作品の持つ特性にふさわしい一定の効果を生み出すためだったのです。

ボッシュを読んだことのある人とかミルトン以降の批評家の多くは、私が『失樂園』に備わっている独特な教訓に目を留めなければ許していただけないに違いありません。私はボッシュのように、叙事詩はまずある種の教訓を選び、そこから物語を展開するのだという意見を認めることはできませんが、高潔な英雄詩なら必ず素晴らしい教訓を導き出せるものと考えます。ミルトンにある教訓は、非常に普遍的かつ有益なものです。手短に言ってしまうと、「神の御心に従順であれば人は幸せになり、その逆であれば不幸せになる」ということなのです。明らかにこれがアダムとイヴに向けられている最も重要な寓話の教訓なのです。彼らは神の命令に従っている間は樂園に留まっているのであって、それに背くや否や樂園から追放されたのです。同様にこれはまた主要な挿話の教訓でもあります。数多くの天使たちが至福の状態から転落し、反抗すると地獄に追いやられることになるのです。この寓話の真髄と見なされるこの崇高な教訓のほかに、この作品には随所にちりばめられ、この作品を他のいかなる作品よりも有益で教訓的なものにしている教訓とまではいえないことが無数に存在しています。

『オデュッセイア』や『イーリアス』や『アイネーイス』を論じたことがある人々は、それぞれの行為があった月日を確定するのに大変苦勞しています。ミルトンでこの点について検討する価値があるとしますと、アダムが初めて登場する第4巻から樂園から追放される第12巻まで、作者が10日間想定していることが分かります。第1巻から第3巻までに述べられている行為に関しては、自然界で起こってはいないのですが、私は以前、これらは時間の計算には組み込まれないのだと述べたことがあります。

私はここでわが国の譽れとなる作品論を終えることにします。寓話、人物、感情、そして言語という4項目について概観し、各テーマについてそれぞれ日を改めて論じて来ました。その次に、それぞれの項目でミルトンが受けた非難について述べました。こういった

22) 『失樂園』第12巻、648-9行。

23) 『失樂園』第12巻、646-7行。

24) 1674年刊行の第2版では、ミルトンは第7巻と第10巻をそれぞれ2巻立てにした。

不愉快なテーマを厭わなかったらまだまだ論じることはできたのですが、これについては2回で止めることにしました。しかしながら、最も辛らつな読者でも、私が述べた欠陥はミルトンが着手した英雄詩の欠陥とは思わないものと信じています。私としては、『失樂園』を称えるには、このように詳細に論じた後で細部について論及しない限り十分ではないと考えた次第なのです。それゆえ、1巻ごとに紙面を割き、全体としての『失樂園』の美点を明らかにするだけでなく、各巻それぞれの具体的な美点をも指摘するように努めました。崇高さが発揮されている節とか、穏やかな節とか飾り気のない節とか、情熱や教訓や感情や表現が優っている節とかを明らかにしました。また、巧みな創案や遠回しの引喩や思慮深い模倣によって、いかに詩人の天分が発揮されているかを明らかにしました。つまり、ミルトンがホメロスやウェルギリウスをどのように模倣したり改良したりしたのかを明らかにし、聖書の一節を用いていかに彼の想像力を高めたかを明らかにしました。さらにまた、ミルトンがお手本としたタッソの一節を挿入することも可能でしたが、私はタッソは必要不可欠な保証人とは考えていませんので、このイタリア詩人に敬意を表するほどの引用をして読者を混乱させるには足らないと考えた次第です。要するに、私は数多くの美点をひとつひとつ列挙することに努めたのです。詩にとって本質的なもので、この偉大な詩人の作品で出会うもの以外は繰り返しをすると退屈極まりないものになってしまうと考えた次第です。私が最初に『失樂園』に着手しようと考えたとき、これほどの分量になると考えていましたら、これに手をつけなかったものと思います。だが、書籍商からの度重なる要請だけでなく、私が評価している方々から暖かく迎え入れられたため、これに取り組むことになった訳です。

第370号 1712年5月5日(月曜日)

【スタイル】

すべての人々が役者を演じる。

非常に陽気でしっかりした男性だけでなくわが麗しの女性読者の多くは、本日のモットーのラテン語にはとても当惑なさいます。私としては、皆さんにその翻訳をさせるべきではないと思いますが、本日は常日頃皆さんの目に留まっているドゥルーリー・レイン劇場に掲げられています「すべての人々が役者を演じる」という意味合いのラテン語を借用した次第です。確かに、周囲を見回し、さまざまな仕事についておられる様子を拝見しますと、皆さんはそれぞれ、役者のように、何らかの役目を引き受けておられます。案件の真相は味方していないと分かっている訴訟で、声高に熱弁をふるう弁護士は、その役に扮しているという点では役者をしているのであって、お金のために自らを売っているという点ではこれほど卑しいことはありません。弁護士の虚言は不正につながりますので、この役者はひとえに注意をそらす役目を装うことになります。真の敬虔と信仰心を奨励するために熱弁をふるう牧師は、より厳粛な地位を軽視すればするだけ、大きな罪悪感を持ってしまう役者なのです。人々が携わっているさまざまな仕事を考えてみますと、その行為の半分は

ほかでもない偽装とペテンになっていることが分かります。真の本性に由来しないものはすべて役者の行為となります。このため、私はことある度に舞台について言及するのです。そこで、どの役割がうまく演じられているかあるいはそうでないのか、どの情熱あるいは感情が流れているかあるいは育まれているか、そしてその結果、これは相互にお手本とすべきものなのですが、どんなマナーや風習が舞台から世間に浸透しているかを考えることがとても重要だと思っています。叙事詩の作家は架空の人物を引き合いに出し、その人物たちの悪徳や美德を描きますが、観察者である私は、仕事に精を出している人々を描写したり警告を発したりするために、時折、舞台に登場する役者の名前を利用します。私がウィルクスは『マクベス』における夫と父親の優しさ、『ヘンリ4世』における改心した放蕩息子の悔恨、『記念祭への旅』における善良な若者の愛嬌のある空虚さ、『古きつね』におけるおせっかいをうまく表現しているからと言って褒め称えるときには、世間でそういった出来事に関わっているすべての人々のことを念頭に置いているのです¹⁾。真価が無視されたり、誤用されたり、誤解されたりしているという場合には、エストコートに大きな才能がないと言っていることになります²⁾。彼の才能が理解されたのは、舞台で頭角を現す他の人々が関心を寄せないからなのです。世間で立派な人物として通用している人に疑惑が生じた場合には、彼に警告を発するために、フォッピントン卿が登場していなくても、(シバーは実にうまくこの上品な振舞いを演じますが)、彼の人間性そのものに嘲笑するよりも賞賛すべき点が多く存在していることになります³⁾。あからさまに喜劇的な人物ということになりますと、舞台での効果がどの程度人々のマナーに影響を与えるか想像することはできません。高利貸しの狡猾さや金持ちの愚か者の馬鹿さ加減や生半可な勇気を持った人物の無様な振舞いや中途半端な知恵者のごちない陽気さなどは、ドゲットの好演によって永久に顔色なしとなってしまいます⁴⁾。ジョンソンは、先だつての夜、コーバッチオを演じることで、これを観た人たち全員に、年老いた強欲さにこの上ない嫌悪感を与えたに違いありません⁵⁾。わけも分からず愛憎が半ばするひねくれ者の老人の苛立ちは、『洒落者の運命』において才能豊かなウィリアム・ベンケスマン氏によって巧みに演じられます⁶⁾。そこでは、ドン・ルイス、またの名を怒りっぽいスナップ・ショートを演じ、お気に入りの人々への質問には応じるだけで、説明は一切求めないのです。ベンケスマン氏はまた、無言の場面で、恐怖と飢えで死ぬ覚悟のできている状況の人に見られるさまざまな表情を出すのも巧みです。彼は全編を通じて、実にうまく立ち回り食糧を手に入れます。もしこれが、私が時折耳にしますように、世間で仕事や遊びをやってゆく上での大きな素養

1) 俳優兼劇場支配人ロバート・ウィルクスに関しては第268号参照。ドゥルーリー・レイン劇場にてマクダフ(3月6日)、放蕩息子ハル(4月7日)などを演じた。

2) エストコートに関しては、第264号、第468号参照。

3) シバーは、1月3日、ドゥルーリー・レインでこの役を演じた。

4) トマス・ドゲット(1660-1721)に関しては、第235号参照。

5) ペンジャミン・ジョンソン(1665?-1742)は、4月29日、ドゥルーリー・レインでベン・ジョンソンの『古きつね』でコーバッチオを演じた。

6) ウィリアム・ベンケスマンに関しては、第31号参照。

となるのでしたら、この才能豊かなペンケスマン氏は実に巧みに喜びと苦しさの感覚を表現していることになります。それは彼の演技を見ていただければよく分かることです。

舞台というものは実際には全体として抑制されたり、思慮深く助長されたりするものですので、絶えず楽しみを求める人々はそれほどの気晴らしにはならず、最高の楽しみまで高めるには自分自身の心の持ち方によるのだと納得しなくてはなりません。ダンスをもっと評価し、これをすべての役者に習得させますと、芝居にとって飾りとなるだけでなく、芝居そのものが大きく向上することになります。ビッケネル夫人⁷⁾ほどの愛嬌があり無邪気な人物で、真似をする能力が備わっていれば、その所作ですべての上品な女性を演じることが可能です。ある踊り手の気立ての良いおしとやかさ、見せ掛けの自信、思いがけない喜び、見られることの苦痛、心もとない決意での観客への応対、孤独感を味わいながらも観客を楽しませようとする気持などが、全員に彼らの経験したことのあるさまざまな心のひだを蘇らせるのです。こういった優雅な楽しみが、満足感に対する分別に磨きをかけます。そして、喜びに対する慎み深さを持つことで、悪徳から立ち直ることができるようになります。ビッケネル夫人にはこの種のダンスに対する無比の能力が備わっています。必ずや彼女は最善を尽くすものと確信しますが、おそらく明日の夜彼女の演技をご覧になった方はどなたでも私の考えに賛同していただけるものと思います。

第371号 1712年5月6日(火曜日)

【アディソン】

賢人が一人笑ったからということで

あなたは褒め称えますか。(ユヴェナリス)¹⁾

読者の皆さんには、本日の気晴らしとしてつぎの手紙をお伝えしたいと考えます。

拝啓

貴殿にはよくお分かりいただけていることですが、わが国はほかのどの国にもまして、酔狂でひょうきんな人たちが多いことで有名です。このため、わが国の喜劇は登場人物の斬新さと多様性という点ではほかのいかなる国よりも勝っていると言えます²⁾。

わが国の生む数多くの酔狂のなかで、自分自身あるいは友人たちのために独自の気晴らしを考え出す人ほど好奇心をそそられるものはないと私は思います。この手紙では、笑劇と嘲笑といったものを備えている人たちをえり分けることに喜びを見出している人々を選び出してみたいと思います。まずつぎの例をお示ししたいと思います。資産家であった一昔前の才人の一人³⁾は、お金は戯れに使って初めて活きると考えたのです。彼は1年間バー

7) ビッケネル夫人は1695年頃に生まれた有名な女優。

1) ユヴェナリス『諷刺』10.28-29

2) アスコリ第2巻、第6章参照。

3) ニコルスその他の編集者は、この人物はバッキンガム公ジョージ・ヴィリアーズ(1592-1628)と

スに滞在していたとき、洗練された人々の集まりで、彼自身も際立っていたのですが、顎の長い人々がいることに気づき、口が顔の真中に見えるひととき目立った人を10人夕食に招待しました。彼らは食卓につくと、なぜ自分たちが一堂に会するのか理解できずに、お互いの顔を見つめ合い始めました。わが国には、「顎鬚が揺れるとき、大広間の中は楽しい」という諺があります⁴⁾。今私が話している人々が食べたり飲んだり喋ったりするたびに、顎の尖った顔が揺れるのでした。食卓を囲んで全員の顎が揃っているのに気づいて、誰もがこの戯れの意味を理解し、上機嫌になりました。そして、それ以来彼らは固い友情と仲間意識が生まれることになったのでした。

この同じ紳士は、その後しばらくして、今度は彼が言うには、あいにく斜視のジロジロ見る人たちを集めました。この時の彼の気晴らしは、断続的で屈折する視線のために生じる会釈のすれ違い、誤解した素振り、間違ったウィンクなどを確かめることでした。

この愉快的紳士は、第三の楽しみとして、口ごもった話し方をする人々を食卓に招きました。彼は召使の一人を屏風の後に配置し、彼らのおしゃべりを書き留めるように指示しました。これは速記の助けを借りずに簡単に出来ました。召使が取ったメモによると、彼らの会話は途絶えることはありませんでしたが、料理の1品目が出ている間に交わされた言葉は20語を上回らなかったようです。2品目が出たとき、そのうちの一人が小鴨とアスパラガスが美味しいというだけで、15分かかったとのことでした。また、別人がそれに同意するのも同様に15分要したとのことでした。しかしながら、この戯れはそれまでの2例ほどうまく行きませんでした。というのは、勇敢で言葉ではなく憤りを露にした客人の一人が、部屋から出て行き、この茶目っ気たっぷりの主人に挑戦状を送りつけたからです。この挑戦状は友人たちの仲裁で後日取り下げられたのですが、このことがこういったおかしな楽しみに終止符を打つことになったのでした。

ところで、おそらく皆さんはこういった戯れには機知ほどの教訓もなく、嘆かわしいものだという私の意見に同意なさるものと思います。しかしながら、人が他人の考えを知って洗練されるのは当然ですし、その人の才能がいかに優れていても、ただの一人でひとつの技を考え出し完璧な形で再現することは不可能ですので、ここで私は知り合いのある誠実な紳士のことを取り上げたいと思います。この紳士は前述の機知に富んだ人物のことを聞くと、自分にも機知があると考え、これを人々のためになるように振り向けようと思いました。彼はそれぞれ会話に「よくお聞き下さい」、「お分かりですか」、「つまり」、「それからね」といった余分な言い回しを差し挟むことで名高い友人たち6名を夕食に招きました。それぞれこの独特な言葉遣いをさかんに駆使する各人は、隣席の人にはとても馬鹿げて見えますので、自分もまた他人から見れば同様に馬鹿げて見えるのだと思わざるを得なくなったのです。これによって、彼らはしばらくすると、誰もがとても慎重に、用心深くお気に入りの虚辞を使わないよう喋りだしましたので、会話の中には余分な言い回しがなくなり、

考えた。

4) この諺は14世紀初めのものとされる。

賑やかさはなくなりましたが、理解はしやすくなりました。

この善意の紳士は、別の機会に、愚かな悪口雑言というのが常習となっている友人たちを一堂に集めました。彼らにその愚かさを教えるために、彼は前述の創案に頼り、部屋の人目につかない場所に「筆記者」を配置しました。2本目のボトルが空き、皆の気持がほぐれて遠慮なく喋り始めたとき、わが誠実な友人は彼らが食卓についてから飛び交っていた言葉に格調は高いが不必要なものが数多くあり、素晴らしい会話もこの不必要な言葉で台無しになっていることに気づき始めました。お互いに法律を履行しないと、貧しい人々に過酷な負担をかけることとなります、と彼は言います。皆はこの優しい叱責を素直に受け止めました。そこで、彼は彼らに、皆さんの会話には隠し立てするようなことはないことが分かっていたので、これを書き留めておくように指示しておいたのです、もしよろしければ、遊びでそれを読み上げましょと言いました。それは10枚に及びましたが、これは私が言っている実に不快な挿入語句がなければ、2枚になっていたのです。これを平然と読み上げますと、人々というよりも悪鬼たちの会談のように聞えました。要するに、誰もが興奮して軽率にも発した自分の言葉を冷静になって聞いて、身震いするのですでした。

もう一つだけ、彼がこの創案を別種の人たちを矯正するために利用した例を取り上げたいと思います。この人たちは礼儀正しい会話の厄介者で、何食わぬ顔でそうするのですが、前二例と同様に時間を無駄遣いします。要は、退屈極まりないお喋りな人たちのことです。わが友人はこの奇妙な病に罹っている知人を6名ほど集めました。第1日目、席に着くと、ある一人がナミュールの攻囲⁵⁾の話を始め、終わったのが午前4時でした。第2日目は、北ブリテンの人の独り舞台でした。皆が座っている間話が途切れることはありませんでした。第3日目も、同様に、同じような長さの話でつぶれました。彼らはやっとお互いを遇するこの情け容赦のないやり方について反省し始め、この数年取り付かれていた倦怠感から覚醒したのです。

貴殿がどこかでこういった異常な人物は喜びを与えてくれる獲物だとおっしゃっていますように、そして、私は貴殿のことを最高の狩人、よろしければ、著述家の中のニムロド⁶⁾と見なしていますので、以上のことは貴殿にも受け入れられるものと考えた次第です。

敬具

第372号 1712年5月7日(水曜日)

【スタイル】

侮辱されて、ひとことも言い返すことができないのは
恥ずかしいことです。(オウィディウス)¹⁾

1712年5月6日

5) 1695年、ウィリアム3世軍は、ほぼ3ヶ月に渡る攻防戦の後、ナミュールを落した。

6) ニムロドは狩りの名人とされているノアのひ孫。

1) オウィディウス『変身物語』1.758-9

観察者殿

小生はコヴェント・ガーデン教区の寺男をしている者です。小生が午前11時のお祈りの鐘を鳴らしていますと、上流階級の人たちが急いで向かい側の人形芝居に駆けつけているという不満を以前貴殿にお伝えしたことがあります²⁾。同時に、小生はまるで紳士階級の人々をそそのかして常軌を逸した行動を取らせているかのようなパウウェル氏と彼の心ない劇団関係者を軽蔑していました。ところがそれはそれとして、小生は今、このパウウェル氏とその劇団の誠実な態度を確信したのです。つまり、彼は明日の夜上演する芝居³⁾の収益は全額、当教区の気の毒な慈善学校の子供たちに寄付するということなのです。小生の聞いたところでは、オランダでは、木であれ針金であれ生身の人間であれ、ショーとか舞台劇を行う人たちは、近隣の誠実で勤勉な貧しい人たちのために収益の一部を提供しなくてはならないとのことです。こうすることで、彼らは気晴らしと楽しみでもって、労働と勤勉に報いるのです⁴⁾。また、ローマ・カトリックの諸国では、四旬節の期間には、恵まれない人々のために尽力する人々は病人の世話もしたとのことです。プロテスタントである我々は、時間の有効な使い方を追求しますので、身の処し方を知る上ではパンチネロに感謝しています。そういった事情ですので、貴殿から、楽しみを中断して何らかの道徳的義務を実践しようとしないう上流階級の人々に、少なくとも自分たちの犯す罪に罰金を払い、恵まれない子供たちに施しをするように要請していただきたいものと思います。ある意味では、彼らの贅沢をほんの少しだけ割いて貰えれば、奔放な遣い方をしている罪滅ぼしとなります。小生には、足繁く芝居小屋に通っているご婦人方に、罪を犯すたびに慈善学校という素晴らしい機関への寄付を義務づけたとしても、不都合なことはないものと思えます。この方法を用いれば、犯罪者自身も公共のためになります。一方、パウウェル氏が絶えず発している馬車やドラムやトランペットや勇壮なパレードや戦闘シーンでの騒音に対して、私たちの教区に自発的な償いをしたことを是非貴殿から公表して貰いたいと思います。ハイランドダンスが登場するトロイの滅亡は、格好の所作となつて、浅薄な娯楽に我慢できない人々を満ち足りた気持ちにさせます。

敬具

ラルフ・ベルフライ

ある著述家がバースでのパウウェル氏に対して述べたあてこすりはすべて不正確で根拠のないものとの情報が確かな筋から小生の元に寄せられています⁵⁾。

観察者殿

株式仲買人をしています私は、よく取引所そばのいくつかの居酒屋に行きますが、そこ

2) 第12号参照。

3) 『デイリー・クーラント』紙5月7日に広告が掲載された。

4) 『タトラー』紙第20号参照。「アムステルダムでは劇場の収益で病院を維持している」

5) 『タトラー』紙第44号、50号、77号、115号参照。

でとんでもないことを目にしました。それを貴殿にお伝えします。どうか貴殿のご意見をお聞かせください。こういった居酒屋の3, 4軒で、時間はまちまちなのですが、重々しい顔つきで、短い髪をつけ、黒服か黒の縁取りのある濃いキャムレットを身に着け、喪に服する手袋と帽子に喪章を巻いた几帳面な人たちのグループに目が留まったのです。彼らは日毎に居酒屋をつぎつぎに替えて会合を持つのです。要するに、ある意味での移動クラブを開いているのです。彼らの顔を度々目にし、彼らがお互いに人目につかないようにこっそりと入って来ますので、私はどちらかという彼らが一様に奇異な服装をしていることに心を動かされて、どんな人たちなのか知りたくなったのです。調べてみた結果、彼らが教区教会の書記たちのグループでした。彼らは互いに気が合い、おそらく、半パイント飲みながら死亡報告書を片付けているものと思われます。私は礼拝のアーメンにまでもとても重要であり、畏敬の念を払う人間ですので、こんなことをしていると、彼らが何か不祥事を起こすのではないかと危惧しています。そこで、彼らには心から、フローレンス・ワインやチキン自宅に持ち帰り、教区の民生委員のような生活の真似をしないよう助言したいのです。

草々

ハンフリー・トランスファー

5月6日

観察者殿

先週水曜日の夜、私は「弁護士クラブ」の人たちと一緒に、シティーのある居酒屋にいました。実はこのクラブの構成員は事務弁護士に限られています。会合では、全員がそのとき扱っている訴訟について話をして、各自がそれまでの経験に基づいて意見を述べるのです。たまたま誰一人経験したことのない事例の場合には、書記のウィルがそれを書き留めます。書記の一人であり、すべての訴訟手続きを記録しているグースキルが、それを法廷弁護士のところへ持参することになります。これは賞賛に値することであり、彼らの会合の主目的とすべきです。もし貴殿が同席して、訴訟の取り扱い方とか調書の作成方法とか喋っている様子、要するに、巧みに処理する人物を賞賛するものの、依頼人の権利を損なうさまざまな方法を話し合っているのをご覧になられたら、これまでに彼らについて意見を述べられていたに違いありません。彼らは秘密を守らなくてはならないことは十分意識していますので、自分たちの仲間以外の人物を同席させることに対しては極めて慎重です。法曹界以外の方が同席するときには、その人物がとても誠実な紳士だと紹介された場合に限られます。その場合、彼らの特殊用語を用いれば、その人物は訴訟費用に報いるために受け入れられるのです。私は中心人物の一人からとても誠実で温厚な人物で、策を弄するようなことはせず、もっぱらお酒を飲み、パイプをくゆらせたいと願っているだけだと推薦されて受け入れられたのです。貴殿は以前にいくつかのクラブについて述べられています。当クラブは往々にして不正行為と虚偽を増大させる傾向がありますので、貴殿がこのクラブに目を留めていただければ幸いです。

草々
エイチ・アール

第373号 1712年5月8日（木曜日）

【バジエル】

悪徳はしばしば美德の衣装をまとして人を騙す。(ユヴェナリス)¹⁾

ロック氏は、『人間悟性論』で、言葉の濫用について2章を割いて論じています²⁾。彼によると、第1の分かり切った言葉の濫用は、明確ではっきりした知識を持たずに使用する場合となります。第2は、一貫性を欠き、不安定な用い方をするために、用いるたびに違った観念を示す場合があげられます。私たちの熟考と推論の結果は、言葉固有の正確な知識がない場合には、必ずや非常に混乱した馬鹿げたものにならざるを得ない、とロック氏は付け加えます。この不都合を避けるために、とりわけ、同一の言葉が常に同一の意味で用いられる道徳的な会話ではその必要がありますが、彼は定義の活用を真剣に奨励します。彼によると「定義こそが道徳の言葉の正確な意味を知ることが出来る唯一の手段」³⁾となります。そこで、彼は前述の理由から、「道徳は数学と同じように論証できる」⁴⁾と思うと言うのはばかりませんので、道徳について語るとき言葉の意味を曖昧にしたまま用いる不注意な人たちを非難します。

私は「謙虚」と「自信」という言葉ほど、解釈が異なり誤まった用いられ方をするものはないと思います。誰某は謙虚な人だと言うと、それはかつては善良な人で通用しましたが、今では、往々にして育ちも良くなり、礼儀正しくもなく、世知も持たないおどおどしたぎこちない人物の意味合いで用いられます。

一方、「自信家」という言い方は、最初は立ち居振る舞いが自由闊達な人のことを意味しましたが、今では普通、礼儀作法や道徳のルールを臆面もなく無視できる品行の良くない人物のことを意味します。

それゆえ、私はここで、これら2つの言葉に本来の意味を取り戻させ、「謙虚」という観念が「気の弱さ」と混同されないように、そしてまた、「厚かましさ」が「自信」として通用しないようにしたいと思います。

私が「謙虚」の定義をするとしたら、「謙虚とは自分が評価される行いをしたときとか、自分が他人の評価にさらされていると思うときの、純真な心の現われ」となります。

そういうわけで、真に謙虚な人というものは、一人のときも人前のときも心持は変わりませんし、恥じらいを覚えるのも一人のときも大勢の人の目にさらされているときも同じこととなります。

1) ユヴェナリス『諷刺』14.109

2) ジョン・ロック『人間悟性論』第3巻第10章、第11章。

3) ジョン・ロック『人間悟性論』第3巻第11章第17節。

4) ジョン・ロック『人間悟性論』第3巻第11章第16節。

謙虚さを示す例としては、ローマの属国の王であった父が元老院で、臣民の暴君、圧制者として申し立てられた若い王子の名高い例にまさるものはない、と私は思います。この王子は父の弁護のためにローマに行きましたが、元老院に出向き、父に対して数多くの犯罪が申し立てられているのを聞いたとき、彼が喋る段階になっても重圧を感じて一言も発することができませんでした。この話によると、この上なく感動的な演説よりもこの謙虚で率直な一例の方が世の父親たちを深く感動させたとのこと。要するに、この罪深い父は、息子に早い時期から美德の兆しがあるとの理由で罪を免除されたのでした。

「自信」とは、自制できる、あるいは、不安を覚えたり感情に左右されたりすることなく、公平に物事に処することができる能力のこと、だと私は考えます。大体において、人に自信を植え付けるのは、世間に対する節度のある知識ですが、特に、自信のある人々は名誉と礼儀作法のルールに反したことは一切行いません。率直で自信に満ちた振舞いは、この決意の当然の帰結です。自信を身につけている人は、たとえ彼の言動が誤解をされるようなことがあっても、自分の殻に閉じこもりませんし、自身の誠実さを信じて、取るに足らない無知とか悪意から生じる非難を見下す力を備えています。

私がここで述べています謙虚と自信は、すべての人に育んで貰いたいと思います。

自信のない人は、話をするあらゆる人の愚行とか意地の悪さに動揺してしまう傾向があります。謙虚さのない人は、名誉と美德に対して無感覚になってしまいます。

前述の王子は、おそらくこの両者の並外れた資質を備えていたものと考えられます。自信がなかったら、王子はこの上なく威厳に満ちた人たちの前で喋ろうという気にはならなかったに違いありません。謙虚さがなかったなら、どれほど憤慨に耐えないものに見えたとしても、申し立てをしなかったに違いありません。

以上のことから、謙虚と自信はともに立派なことであり、同一人物に兼ね備わって当然です。両者がともに備わって融合されますと、「謙虚な自信」という言い方が可能になります。この言い方は、内気と厚かましさの中庸を意味するのです。

締め括りにあたって、同一人物が謙虚で自信があると言えるように、同一人物が厚かましく内気だと言うことも可能なのだと言っておきたいと思います。

墮落しており、教育程度の低い人たちの中に、これらの資質が奇妙に入り混じっている例はよく見かけます。彼らは人の目を直視できず、意見を述べるにも絶えずどぎまぎしているのですが、自分の意志でとんでもない悪とかこの上ない不作法なことをしでかすことが出来るのです。

こういった人は、われ知らずに、また、心に課していると思える抑制を無視して不善をなす決意をしているようです。

あらゆることを考え合わせてみて、私は美德の実践こそが言動に自信をもたせるのにふさわしい方法だという処世訓を打ち立てたいと思います。罪は常に両極端の一方に身を寄せようとします。そしてまた、時にはこの双方を伴うことがあるのです。

第374号 1712年5月9日（金曜日）

【スタイル】

やるべきことがある間は、何一つ
やっていないと言う。(ルカヌス)¹⁾

よく見られることなのですが、呼称のついていない過失があります。これは遅延とは正反対です。すぐにやるべきことを一日一日先送りすることによって、現在の時間を浪費するように、私たちの多くは、過去を回想し、すでに義務は果たし、人間としての地位も確立したと思って、何もせずじっと座り、目の前にある時間を浪費します。このように、今後の振舞いの助けとなるように、自分の立場をはっきり説明するというより、すでに行った自分のことに重きを置きますと、自身の長所に傲慢になり、現在の勤勉に傷をつけることになります。各人の状況に従って、不屈の精神と沈着さと節度を持って現在という時間を大切に使うのが鉄則だ、と私は思います。もし過去の行為が私たちを責めるからといって、反対の振舞いをして、また、いくら効果的な非難の言葉を用いても、過去の行為の償いをすることはできません。同時に、過去の行為が賞賛に値することであっても、その思い出は何の役にも立たず、せいぜい、それにふさわしい行動をするに留まります。そこで、現在の善行が過去の誤りに対する暗黙の悔悛となりますが、現在の怠慢は過去の行動の償いとはなりません。時は私たち同時代人が昨日やったことのすべてを飲み込んでしまっています。それはちょうど時が大洪水以前の人たちの行動を飲み込んだのように、取り返すはつきません。私たちは覚醒し、今日は何をしようかと考えますが、しゃべっている間にも今日という時間は流れて行きます。昨夜の愚行を思い出し、明日の美德を決意するのでしょうか。昨夜は確実に過ぎ去り、明日はまだやっては来ません。この今を利用するのです。あなたは名誉と美德を重んじる人に親切にできますか。これはすぐさま行動に移してください。あなたは病気になった友人を訪ねることができますか。あなたが入って行き、病気を慰めるためにあなたの安楽と楽しみを一時的に差し控え、苦しむ気の毒な人の見当違いな言葉に耳を傾けているのが分かれば、友人は元気付けられます。馬車に乗って立ち去ってしまっただけではいけません。恋人は悲しみを、酒は錯乱状態をもたらします。このどちらにも頼ってはいけません。こういった気晴らしはすべての男性に共通するものです。ところで、現時点の活用を一時停止し、よりよき将来を望むことが許しがたい愚行であることは誰でも十分に分かっています。私が考えようとしたことは、すでに十分やり終えたと考えて、過去に重きを置くことの害なのです。人生のあらゆる任務を昨日までの最高度の価値で満たしてしまい、それを自分の心の中にしまっただけで今日という日を生き始めますと、その人は名声という点で、昨日亡くなった人と考えられてしまいます。注目される人の周りには多くの人たちがいるのであって、もし歩み続けていなければ、彼の前を進む人は彼の前進を阻止し、彼の後塵を拝している人は彼を踏みつけます。カエサルは、「やるべきこと

1) ルカヌス『内乱記』2.657

が残っている間は、何一つやっていないと考えた」²⁾ のことですが、それまでの行動の手柄によって、自分にひと休みする特典があるとは考えずに、もっと大きな手柄を立て続けました。この輝かしい名將は、彼が経験した出来事を記録に留めさせましたが、これは彼が一つ一つの出来事で名声を打ち立てるためというよりはむしろ、人々にそれを検証させるために、自らの行動を記録させ、はっきり分かるようにするためだったのです。すでにやったことではなく、これからやることを支えにするというのが彼の人生訓であったことを示すために、彼の残した言葉から二つ取り上げたいと思います。ファルサルスの戦いで勝利をおさめた年に、彼が掲げた銘板に、自身の振舞いに対するつぎのような大雑把なメモが見つかりました³⁾。言及されている状況から、これは同日の夕方に記載されたものと考えられます。

「私の役割は今始まったばかりで、私の栄誉は私がこの勝利を活用するまで持続させなくてはならない。そうでなければ、私の損失はポンペイウスの損失よりも大きなものになるに違いない。我々の個人的な名声は、それぞれの運次第で上ったり下がったりするものだ。囚人たちの中で私の個人的な敵はすべてその命は救ってやることにする。私はまたこういった勝利の日を獲得するために個人的な敵のことは忘れることにする。トレバティウスは私の顔を見ると恥じ入るのだ。私は彼のテントまで足を運び、内密に和解しよう。私の味方をした名誉を重んじる人たち全員には、私が戦いの前に提示した条件を満たしてやりなさい。この勝利は長らく私の味方をしてしてくれた友人たちのお陰なのだ。権力はそれを十二分に行使してしまうと弱まるが、節度を守ると強化される。ガルビニウスは誇り高い男だ。現在の運命では卑屈になるだろうが、彼はそのままにしておきなさい。ステルティニウスを呼んできなさい。彼は謙虚な男で、彼の美德は評価されて当然だ。私の気持ちの高ぶりは沈思したことでおさまった。明日は兵士たちとともに喜ぶ用意ができた。彼は戦いの間は一私人のように自らをさらけ出せる人気のある将軍だが、勝利した後でも喜ぶことができればもっと人気が出て来るのだ。」

名誉と美德を追いかけていると自負している人たちにとって特にふさわしいお手本は、普通の人なら安泰だと考え、喜びと勝利にうつつを抜かしているときに、この英雄は名声に対して並々ならぬ願望を抱くという点です。ところで、これは彼の気質のとても優れた一例ですが、正直を言って、私は彼が死ぬ前夜、カルプルニアの見た不吉な夢を聞き、心が乱れて自室に閉じこもって彼がいろいろ考えたその内容に魅力を感じます。本日の締め括りとしてこの断章の逐語訳をもってきたいと思います。

「そうであるならそれでよい。私が明日死ぬことになるとしても、それは明日のことだ。そうなるなら喜んで受け入れる。嫌だからという訳でそれから逃げはしない。私が死ぬのは神々の思し召しであって、自分の意志ではない。カルプルニアの夢が消化不良からくる苛立ちのせいだとしたら、どうして私が明後日を迎えたらいいのか。彼女の夢が神々のな

2) ルカヌス『内乱記』2.657

3) カエサルのメモについては確かなことは分かっていない。

せるわざであるなら、この警告は天命から逃げ出す用意をさせるためでなく、天命を迎えることなのだ。私は十分に栄光の日々を生きた。カエサルは古代の英雄たちと同じように誉れ高い人生を送ったのだ。カエサルはまだ死んではない。カエサルは死の覚悟ができているにすぎないのだ。」

第375号 1712年5月10日（土曜日）

【ヒューズ】

彼は祝福された人々の中に含まれていない。
 神々は祝福された人々には大量の蓄えを提供する。
 だが、十分に所有している彼は、神からの贈物を
 賢く使用することができる。
 不機嫌な運命、忌み嫌われた貧困の重圧に耐えることができ、
 死よりも卑劣であることを恐れるのだ。（ホラティウス）¹⁾

私は、逆境と闘い、克服しようとしている徳高い人は神々自身が喜びをもって見つめる対象だという哲学者セネカの崇高な発言を一度ならず取り上げてきました²⁾。そこで、本日の思索としては、読者の皆さんに、私生活でこの種の苦境に立たされている例を提示したいと思います³⁾。

信望もありいい暮らしをしていたある著名な市民が、一連の出来事と避け難い難局に見舞われたため、落ちぶれてしまったのです。不可抗力から生じる貧困には通例謙虚さが伴います。そのため、彼が破産したとき、友人に頼んで財産があるように見せようとはしないで、現状に合わせた生活をする道を選択しました。分別と徳を備えた彼の妻は、この上なく立派な振舞いをし、夫の目には今まで以上に好ましく映りました。彼女は多額の持参金とか拒んだ数多くの求婚のことで、彼に文句を言うどころか、それまでもまして献身的に振舞いました。一方、夫は妻に向かって絶えず自分はこの世で最高の女性を台無しにしてしまったとの胸の内を明かすのでした。彼は時々妻の予期せぬ時間に帰宅し、涙に暮れている彼女の不意をつきました。彼女は涙を隠し、いつも快活を装って彼を迎えるのでした。二人は出費を抑えるために、長女（アマンダと呼ぶことしますが）を、田舎に住む一家の召使と結婚している正直者の農夫の家に送り出しました。この娘さんは迫り来る破滅を心配しており、ひそかに時折父親の状況報告をしてくれるようにとの約束を近所の友人と交わしていました。アマンダは若くて美しい盛りでした。狩りのあとでしばしばこの農夫の家に立ち寄っていた莊園領主が、そんな彼女に熱烈に惚れ込みました。この領主は非常に寛大な人物でしたが、いい加減な教育を受けたため、結婚に対して激しい嫌悪感を抱いていました。そこで、今はこのことは秘密にしておくのが賢明だと考えたのですが、

1) ホラティウス『頌詩』4.9.45-50

2) セネカ『摂理について』2.8-9

3) スティールは、第537号の最後で、本号はヒューズが書いたと記している。

彼は彼女の操をねらうことにしました。彼の意図に疑いを差し挟まないこの無邪気な娘さんは、彼の人柄が気に入り、彼の自分への気持が募っているのを知って、こんな有利な結婚をすれば、すぐにでも貧窮した父親を支えることができるのではないかと考えました。ある日、この領主が彼女に会いに来たとき、彼女は友人から来た手紙を読んで涙を流しているところでした。その手紙には父親が差し押さえによって無一文になったと書かれていたのです。彼女の悲しみの原因を知った領主は、この機に乗じてひとつの提案をしました。彼の申し出が恥ずべきことであることを知ったときのアマンダの困惑は言葉では言い尽くせません。彼女は今やあらゆる希望を奪われ、口を開く気力も失くしてしまいました。彼女は、この上なく動揺している彼のもとから逃げ出し、自分の部屋に閉じこもったのです。彼は直ちに彼女の父のもとへ、つぎの手紙を持たせた使いを出しました。

前略

貴方の災難をお聞きました。そこで、貴方の娘さんに、一緒に暮らしてくれれば、彼女に年4百ポンド渡し、貴方の負債の総額を肩代わりするとの申し出をしました。私は率直な人間なので、結婚するつもりはないと申し添えておきます。だが、貴方が賢明な方であれば、娘さんに貴方と貴方のご家族を救い、娘さん自身が幸福になれるチャンスがあるとすれば、貴方は父親の権威を行使なさり、娘さんにあまり気取らないようにと助言なさるはずです。

草々

この手紙がアマンダの母親の手に渡り、彼女はその手紙を開封し、非常に驚き、心配しながらそれを読みました。使いの者に何と言っていいかわからず、明日の朝また来てくださいと頼み、娘には以下の手紙をしたためました。

親愛なるわが子へ

お父様と私は今、貴女を愛しているふりをなさっている紳士からの手紙を受け取りました。そこには私たちの不幸を侮辱し、私たちを現状よりもっとひどい状況に追いやる申し出が書かれています。この野卑な男は、親が子供に破廉恥な行為をさせ、身の破滅をさせてでも、自分たちの困窮の埋め合わせをする気になるとでも思っているのでしょうか。私たちが窮して何でもするに違いないと思って、こんな申し出をすることは、さもしくあこぎなことです。私たちは恥をさらしてまで糊口を凌ぐようなことはしません。それゆえ、貴女は私たちのことを気に掛けずに、操を守ってください。決して罠にかかってはいけません。私たちに同情しないように気をつけてください。私たちは、おそらく貴女の耳に入っているほどひどい状態ではないのですから。そのうち万事うまくいきます。また、吉報をお知らせします。

仕事の邪魔が入ったのです。どうして事態が好転するという気になったのか、私には分かりません。やりくりをしているとき、ノックの音がしてびっくりしたのです。私たちに

長年に渡る借金に予期しない助けが舞い込んだのです。貴女にはすべてお話します。生活費もほぼ底をついて数日経ち、貴女の気の毒なお父様に私が用立てることができるお金はこれ以上何もないと伝えたのです。お父様の状態を考えると、貴女は涙を流すことでしょう。だが、安心してください。お父様はすぐに自由の身になります。この非道な手紙を読めば、お父様の気持が砕けていたに違いありませんが、お父様にはこの手紙を見せていません。今ここにいるのは幼いファニーだけです。彼女はそばに立って、手紙を書いている私の表情を見つめています。お姉さんのことを思って涙を流しています。彼女は私が貴女のことで苦しんでいると知って、お姉さんはきつとうまく行っていないのだと言います。だが、貴女を悲しませるために、私の悲しみを繰り返すようなことはしません。今よりもさらに悪くなるようなことを付け加えて、耐え切れないようなことにしたくありません。自分たちのせいではないこの苦難には、私たちは快活に立ち向かいます。純潔を捨てなくても、私たちをこの状態から救い出してくれる力が必ずあります。神様どうか私の愛する娘をお守りください。

貴女を愛する母より

使いの者は、この手紙をアマンダに渡すと約束したにも関わらず、最初に主人に渡しました。使いの者は、まず主人に渡したほうが主人が喜ぶと考えたのです。主人はうまくいったかどうか知りたくてうずうずしていました。そこで、彼はこっそりその手紙を開封して内容を確認しました。彼は悲嘆に暮れる美德の実像を知って少なからぬ心が動かされました。だが同時に、彼の申し出が拒絶されたことを知って非常に驚きました。しかしながら、彼はその手紙を隠さず、もう一度慎重に封をして、アマンダのところへ持って行きました。アマンダが彼は母の手紙を持参したのだと確信するまで、彼女に会いたいという彼の努力はすべて無駄でした。彼は自分が部屋にいる間に読むという条件をアマンダが受け入れない限り、手紙を渡そうとはしませんでした。アマンダが読んでいる間、彼は細心の注意を払って彼女の顔を見つめていました。彼女の心遣いが彼女の美に新たな優しさを与えました。彼女がわっと泣き出すと、彼は彼女の悲しみを共有せざるを得なくなり、自分もまた、手紙を読んだ償いをする積もりだと言いました。わが読者の皆さんは、彼がアマンダの母宛に書いた第2の手紙をご覧になれば、気を悪くなさらないものと思います。

奥様へ

私は恥ずかしい思いで一杯です。過日の手紙で奥様のお許しがでなくても致し方ないことだと考えます。苦しんでおられる方をさらに苦しめることになるとは、思いもよりませんでした。奥様のことをまったく存じ上げない私はとんでもないひどいことを書いてしまいました。このことに対して、私が生きている限り、息子として償いをさせていただきたいと思います。アマンダが奥様の娘さんである限り、奥様は幸福です。どんなことがあっても、その幸せは妨げられないものと思います。

草々

彼はこの手紙を執事に持たせました。そしてほどなくして、彼自身が決意した寛大な行為を履行するために上京しました。彼の友愛と援助によって、アマンダの父親は直ちに困窮状態から救い出されました。結論を言いますと、彼はアマンダと結婚し、善良な家族を元の幸福な家族へと回復させ、また、自分は徳高い人たちとの姻戚関係を持つことによって幸せになるという二重の満足感を獲得したのです。

第376号 1712年5月12日(月曜日)

【スティール】

ピタゴラスの孔雀から。(ペルシウス)¹⁾

観察者殿

しばらく前に、貴殿が看板監督官²⁾として指名なされた係官は、貴殿の注目に値するような公道での奇異な出来事を伝える任務を果たしておられないのではと思います。小生がこれまでに遭遇した奇異なことの中でも、これからお伝えすることほど小生を喜ばせたものはありません。貴殿は、街頭の呼び売り商人たち³⁾がその口調そのものおよび喋り方、あるいは悲鳴とまったく見分けのつかないとても特異なやり方で通行人や住民たちの注意を喚起するのだということに気づいておられるに違いありません。小生が非常に愉快に思っている人物は、売るものは何もなく、ただひたすら、人々に施しを必要としているのだということを知らせる彼独特のやり方でもって、人々から厳かに施しを受けるのです。貴殿はきっと、シティーおよびタワー地区の外れを歩き回っている老人のことを耳になさっておられることでしょう。この老人は彼の短いセリフのあとをつけ、ガーガー鳴いて相づちを打つガチョウを一羽従えて、昼間の見回りをしているのです。先日、その地区で竿を1本手にしたよぼよぼのお年寄りを見かけるまでは、この名立たる出来事のこと是一切気に掛けていませんでした。このとき、この老人が「1時30分」と大きな声をあげますと、彼の後ろについている薄汚れたガチョウが直ちにガーガーと応えたのです。小生は思わず、通りのなかほどまでこの厳粛な行進の後をついて行きました。そして、誰もが時刻を告げ、元気よく家を出て行く時間を知らせている真昼時の物悲しい真夜中の声にすっかり馴染んでいることを知って少なからぬ驚きを覚えました。小生はこの珍しい出来事で頭がいっぱいになりましたので、友人の家に入って行き、異様な忠告者とそのお付きがいかに面白かったかを伝えました。すると、わが友人がその由来を教えてくださいました。小生が老人のことを褒め称えていると、老人とガチョウの暮らしが成り立っているのはリーダーというよりもむしろガチョウのお陰なのだと言って、小生の話の腰を折るのです。どうやら、ガチョウの前を歩く人物は、以前は夜警をしていて、ガチョウは持ち前の警戒心から彼の声の頻繁に聞くことで、単に用心するだけでなく、時折きまったように彼の声に応じるようになって

1) ペルシウス『諷刺』6.11

2) 第28号参照。

3) 第251号参照。

たとのことです。夜警はその応答に心を動かされ、そのガチョウを買い入れ、相棒にしたのです。そして、勤務時間を夜から昼に変えたのでした。町の人々がこれを受け入れ、老人とガチョウの暮らし向きはとても快適なものとなっているのです。以上が実態です。そこで深遠なる哲学者の貴殿へのお願いですが、本能と理性のこの協調関係について考察していただけないのでしょうか。貴殿の思索はごく当然のように、人間の持つ優れた力が、ガチョウの水準に近いこの夜警のような人たちにどのように作用しているかといった点に向かうものと思われます。この実際的な観察に、貴殿は年齢や時代を超えて、世の中の人々は奇妙でわけの分からない事柄に心を奪われてきたのだと付け加えられるかもしれません。このガチョウの表象では、何がどうなっているか分からないために、どんな時でも目を見開いて注視している指導的な人物の行動様式を考察なさるかもしれません⁴⁾。

すべて貴殿の観察者としての知恵に委ねたいと思います。

敬具

雄ガチョウのマイケルより

観察者様

私は若いご婦人方の教育に携わって数年になります。それぞれの能力と富に対して当然の報いを受けるように、その責任を果たす努力をしてきました。各人に謙虚で礼儀正しい心と優美で気品のある物腰を植え付けるために精一杯のことをしてきたのです。そして、彼女たちを家事に精通させる努力をしてきました。だがそれでも、いわゆる育ちの良い女性として尊敬される人たちに認められるものとは異なるのですが、私の教え子たちには不足していることがあります。ところで、白状しますが、私は彼女たちには一度もダンスを学ばせたことはありませんでしたが、貴方がダンスのことで、規則的な動きには美点があると述べておられた記事⁵⁾を読んでから、今後は私の教え子たちにダンスを習得させることにしたのです。だが、ご両親たちに私の計画を伝える段になりますと、しばらくの間とても不安になりました。なぜなら、何名かのご両親が、自分たちの推薦する先生を採用しなければ、子供たちを引き上げると明言したからなのです。民兵隊の大佐をなさっておられるジャンパー大佐のご夫人がいらっしゃいますが、この方は教区民にとっても大きな関心を寄せておられます。彼女はトロット氏⁶⁾のことを彼ほどジグの上手な方はほかにはいない、彼が考えられないほど楽々と6、7人を同時に抱え上げるのを見たことがある、彼こそ町で最も素晴らしい先生だ、と言って彼を推薦なさいます。また、参事会員のご夫人プリム様がいらっしゃいますが、この方はご自分と同名の先生を推薦なさいます。彼女がおっしゃるには、この先生は親戚ではないが、とても優れた方で、ダンスにとっても柔和な雰囲気があり、お茶の席やかぎタバコ入れの出し方とか扇の動かし方とか太っていても痩せていても、また顔が長くても卵型であっても、最も魅力的なつけばくろのつけ方などでの細やか

4) ここでは明らかに盲目的な忠誠心について触れている。

5) 第334号参照。

6) 第296号、308号、314号、316号参照。

な振舞いを教えてくれるとのこと。このご夫人に言わせると、以上のことには思いもよらないことがいろいろあるということなのです。ところで、正直を言いまして、私が関心を持っています大事な部分は私の気持次第なのです。そこで、この件について寄稿なさったお方を私の自宅まで派遣していただけないでしょうか。これに打ち込むことで無知に新たな魅力が加わり、表情で美德が判読できるようになるのであれば、私は私の教え子たちの容貌や身のこなしに、私が彼女たちの教育でどれほど細心の注意を払っているかの証が見えるようにするための労を惜しまないつもりです。

草々

用心深いレイチェルより

第377号 1712年5月13日（火曜日）

【アディソン】

何を避けたらよいか分かるのは稀な事だ。

心構えの出来ていない私たちはおしまいだ。(ホラティウス)¹⁾

以前から恋は詩の母でしたし、今でも、無知で粗野な人たちの間では無数の想像上の嘆きや泣き言を引き起こさせる源となっています。恋をしますと、従僕をオルーンデイツ²⁾のような喋り方にさせ、粗暴な田舎者を礼儀正しい若者に変えてしまいます。この上なく平凡な庶民や戦人も恋をすると、この情熱が自然に生み出すある種優美で敏感な気持ちにさせられて血の出る思いをし恋わずらいをすることになります。

この優しさに取り付かれたこういった心の悩みは、ある種の言葉遣いを生み出し、身分の上下を問わず、つまり、死ぬほど恋をしている哀れを誘うすべての人々がその種の言葉遣いとなります。

まさに存在そのものをこの情熱に委ねているロマンスには、隠喩的な死が満ち満ちています。英雄的な男女であれ、騎士であれ、郷土であれ、乙女であれ、彼らはすべて瀕死状態に陥ります。現代の悲劇にも同種の死があります。そこでは、誰もが喘ぎ、卒倒し、血を流し、亡くなります。詩人たちの多くは、この情熱の発揮する威力を表現するために、女性のことを目でもって人を殺すバシリスクだと描写します。だが、私が思いますに、カウリー氏は道理に適った想像力を発揮して、美しい女性を体のあらゆる箇所から矢を放つヤマアラシにたとえています³⁾。

私はしばしば、この普遍的な病気を治す効果的な方法は、これを生み出す動機について考えて見るしかないと考えています。この情熱が愛しい人の徳とか理想から生まれるときには、私は決してその邪魔立てをするつもりはありません。しかし、傷や死に対する耐え難い訴えが、自身の妄信的な想像力によって魅力へと高まっている取るに足らない見せ掛

1) ホラティウス『頌詩』2.13.13-14

2) ラ・カルプルネード (c.1610-63)『カッサンドラ』

3) カウリー『アナクレオン風の詩』3

けのこびから生じているときには、異状の原因を提示するだけで、十分これを治癒することができます。

以上の観点から、私は瀕死の人々から来た手紙の束に目を通し、つぎのような死亡報告書を作成しました。読者の皆さんには、どこが危険極まりない場所か、また、どんな致命的な技を駆使して不注意で無用心な人を殺すのかを理解していただくために、この報告書に一切前書きをつけずに提示したいと思います。

ライサンダー：9月3日、人形芝居観劇中に殺害される

サーシス：ピカデリーにて窓から射殺される

ティー・エス：馬車から降りるゼリンダの緋色のストッキングによって負傷

ウィル・シンプル：オペラ座にて、隣の男性に向けられた視線に魅了される

トマス・ヴェインラブ：舞踏会にて命を落とす

ティム・タトル：弓形の張り出し窓のコケティラと気楽にお喋りをしているときに、左肩を扇でボンと叩かれて死亡

サー・サイモン・ソフトリー：ドゥルーリー・レイン劇場にて、不機嫌な顔つきをした女性によって殺害される

フィランダー：襟飾り⁴⁾を直しているクレオラから致命傷を負わされる

ラルフ・ゲイプリー：環状道路⁵⁾にて、手当たり次第放たれた矢が命中

エフ・アール：4月31日、船上にてひどい風邪をひく

ダブリュー・ダブリュー：ドゥルーリー・レイン劇場のボックス席で手袋を外して振り回している名も知らぬ女性の手によって殺害される

法廷弁護士サー・クリストファ・クレイジー：鯨骨のペティコートに触れて負傷

シルヴィアス：セント・ジェイムズ教会⁶⁾にて扇の柄で死亡

デイモン：ダイヤモンドのネックレスで心臓を射抜かれる

郷士トマス・トラステイ、フランシス・グースキル、ウィリアム・ミーンウェル、エドワード・カロウ：寡婦トラップランドの色目で4人とも同時に討ち死にする

トム・ラトル：劇場を出るとき、ある婦人の裾を踏みつけ、彼女に振り向かれ即死

ディック・テイストウェル：『記念祭への旅』⁷⁾ 第3幕で、「女王ボックス席」からの一瞥によって殺害される

服飾小間物商サミュエル・フェルト：イズリントンへの散歩中、スザンナ・クロスステッチ夫人が階段をよじ登っている姿を目にして負傷

4) 第38号参照。

5) 第15号参照。ハイド・パークの環状道路のこと。

6) セント・ジェイムズ教会はピカデリーにあって、アディソンの時代ではロンドンで最も洒落た教会であった。

7) ファーカー作で、5月6日、ドゥルーリー・レインにて、ウィルクスとオールドフィールド夫人が主役を務めた。

アール、エフ、ティー、ダブリュー、エス、アイ、エム、ピー氏等：先だっの女王誕生日⁸⁾の大虐殺によって処刑される

ロージャー・プリンコ：美白化粧水⁹⁾によって、21歳にて夭折

ミュージドラス：ベリンダの左頬のえくぼから放たれた矢で殺害される

ネッド・コートリー：フレーヴィアが故意に落した手袋を拾って渡してやり、彼女のお辞儀をする姿に接して絶命

ジョン・ゴスリン：二つの青い眼に軽傷を負い、逃げ出そうとしたとき、微笑まれたために処刑される

ストレフォン：平土間席を見下ろすクラリンダに殺害される

チャールズ・ケアレス：突然馬車から顔を突き出した15歳の少女に射抜かれる

ジョサイア・ウィザー：独身女性エリザベス・ジェットウェルによって、63歳にして終の住みかへと送られる

ジャック・フリーラブ：苛立つメリッサに殺害される

紳士ウィリアム・ワイゼイカー：モル・コモンの涙の洪水で溺死

郷士ジョン・ブリードウェル：ミドルテンプレート法学院の法廷弁護士、今月6日、助言を求めにやって来たふりのキティー・スライによって、執務室にて暗殺される

第378号 1712年5月14日（水曜日）

【スティール、ポープ】

年齢も熟し、今にも名誉が

ああ、最高の果実が。(ウエルギリウス)¹⁾

読者の皆さんにつぎの詩を喜んでご紹介します。この詩は、偉大な才能を持った私の友人が書いたものです。彼はなんのためらいもなく、創造主を賞賛するときに、彼の知性を駆使します。

救世主²⁾

預言者イザヤに関する数節からなる聖なる詩

ウエルギリウスの「ポリオ」に似せて

そなたたちエルサレムの乙女たちよ！ 歌を始めなさい。

天上のテーマにはより崇高な曲がふさわしい。

8) 女王誕生日の舞踏会が2月6日行われた。

9) 『ガーディアン』紙第116号に、アディソンは「私は美白化粧水を非難する説教を聞いたことがある、色つきのリボンは無改宗のしるしだという」との旨の記事を書いた。

1) ウエルギリウス『エクロガエ（詩選）』4.48

2) 「救世主」はアレキサンダー・ポープの作品で、ここで初めてスティールが活字にした。

苔むした泉と森の木蔭やピンドスの夢と
アーオニアの乙女たちはもはや楽しくない。
熱意を込めてイザヤの聖なる唇に
触れたあなたは私の声を鼓舞する。
来世のことに心を奪われた詩人は始めた。
処女を妊娠させ、息子を生ませよう。
エッサイの木から枝が出るのをご覧なさい。
その聖なる花が空に芳しい香りを一杯撒き散らす。
木々の葉にはこの世のものとも思われぬ霊を漂わせよう。
そして、頂には聖霊が舞い降りる。
ああ、天よ！ その高みからさわやかなネクトルが降り
静かに慈雨を降り注ぐ。
病人や虚弱な人たちには、癒しの草木が助けとなろう。
嵐には避難所を、暑さには日陰を用意しよう。
あらゆる罪も古来の欺瞞もなくす。
正義の女神を蘇らす。
オリーブの枝が平和をもたらし、
天上から白衣を纏った「潔白」が舞い降りる。
時の流れは素早く、待ちに待った朝が訪れる。
春が到来し、幸運な赤ん坊が生まれる。
ほら、自然は、息づく春の芳香を漂わす
最初期の花輪をもたらす。
聳え立つレバノンの山が頂を見せ、
一帯の森がそよぎ、雲が低地のシャロン平野から
元気よく立ち昇り、花で一杯のカルメル山の頂が
空に香りを撒き散らす。
ほら、喜ばしい声が寂しい砂漠を元気づける。
準備をするのです、神が、そう、神が姿をお見せになられる。
「神よ、神よ」、山々が声を出して応じる。
岩石が神の接近を告げる。
大地は空から降りて来られる神を受け入れる。
山々は姿を消し、谷間が顔を出す。
スギの木々は頭をたれ、敬意を払う。
耳の聞えぬ人たちよ、神の声に耳を傾けなさい。
目の見えぬ人たちよ、神のお姿を目にしなさい。
濃いもやの中から現れた神が、目に達する光の通り道を清め、
目の見えない眼球に日の光を降り注ぐ。

閉ざされていた音の道を清めてくれるのも神だ。
新たな調べが開かれた耳を魅了する。
口の利けなかった人々が歌を歌い、足の悪かった人々が杖を捨て、
跳ね回るシカのように元気よく跳びはねる。
この広い世界にはため息もつぶやきもなくなり、
みな顔から涙が一掃される。
死神は強固な鎖で縛られ、
地獄の残忍な暴君は永遠の傷を負わされる。
善良な羊飼いは羊の世話をし、新鮮な草地ときれいな空気を探し、
迷える羊を探し出し、横道にそれた羊を元に戻す。
昼夜を問わず、羊たちの保護に努め、いたいけな子羊を
やさしく抱かしめ、手ずから餌を与え、胸に抱いて暖めてやる。
人類はこうにして、約束された父として庇護者の役割に携わる。
もはや国と国の対立はなく、激しい兵士たちも憎しみの目を向けることはなく、
きらりと光る武器が飛び交う戦場もない。
耳障りなトランペットが怒りを煽ることもない。
無用となった槍は鎌に、幅広の刀は鋤の刃に変えよう。
そして、宮殿を建て、喜びに溢れた息子は短命だった父のやり残したことを
完成させる。ブドウの木が一族を庇護し、蒔いたその手で刈り取ることになる。
不毛の荒地にいる牧夫は、ユリが芽を出し、草木の緑で覆われる光景を
驚きの目で持って見る。そしてまた、乾ききった荒野では、新たに流れ落ちる
滝の音を耳にしてはっとする。
竜のかつての住処であった裂けた岩山には、緑のアシがそよぎ、ガマが揺れる。
荒れた砂だらけの谷間は、かつては、トゲに悩まされていたが、
今や、尖塔状のモミの木と均整の取れたツゲの木が彩りを添える。
葉のない灌木に代わって花咲くシュロの木が生え、
いやな臭いの雑草に代わって香りのよいギンバイカが生える。
子羊は狼と一緒に青々とした牧草地で草を食む。
花のバンドをつけた少年たちがトラを引き連れる。
雄の子羊はまぐさおけをライオンと共有する。
無害なヘビが巡礼の足を舐める。
微笑む幼児はトサカのあるバシリスクと斑点のあるヘビを手にし、
嬉しそうにうろこの緑の光沢を見ながら、ふたまたに分かれた舌と
なまぐらの毒牙をもてあそぶ。
荘厳なサレムは光の王冠を身につけて聳え立つ。
聳え立つ頭を上げ、顔を上げる。
広々とした宮廷には長大な家系が続く、

まだ生まれていない将来の息子や娘が、あちこちから群がり、生を求め、
天空を待ち望んでいる。
野蛮な国々が門のところへ押し寄せ、あなたに教えを請い、
あなたの聖堂でひざまずく。煌々とした祭壇にはひれ伏した王たちが群がり、
シバの春がもたらした産物が山高く積み上げられる。
イドマヤの森が香りの良い風を吹き寄せ、オフルの山々の金が輝く。
天国のまばゆいばかりの門が広く開け放たれ、あなたに光の洪水を浴びせる。
もはや昇る太陽が朝を金色に染めることはないし、
夜の月の女神キュンティアが銀色の角笛をふくらますこともなく、
あなたの優れた光にまけて薄れてしまう。
ひとつの栄光の潮流、ひとつの澄み渡った輝きがあなたの宮廷に溢れる。
神の光が啓示となって輝き、神の永遠の日はあなたのものとなる。
海は衰え、空は尽き、岩は塵となり、山は溶けてなくなる。
しかし、確固とした神の言葉、神の加護の力はあることはない。
あなたの王国は永遠に持続し、救世主が君臨なさる。